国　　語

（解答番号 1 ～ 34 ）

※国語は「経済経営学部」および「人文学部」は必須。
「健康医療学部」および「バイオ環境学部」は選択。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

リポーターの役割は〝現場〟に足を運ぶこと、そして〝価値ある情報〟を運んでくることである。人々に知らせるだけの価値ある情報でなければ、単なるポーター（運搬係）でしかない。

これは、私が報道番組の取材を長年経験してきての実感である。リポーターとして取材した分野は、災害報道、選挙報道を始め、政治、経済から事件、事故、裁判、教育、文化、芸能、スポーツなど多岐にわたる。政治家にも、映画監督にも、ノーベル賞受賞者にも、クラシック音楽のキョ[a]ショウにも、競馬の騎手や調教師のもとにも足を運んできた。

リポーターの仕事は、半分が力仕事のようなもので、重いカメラ、三脚、照明や音声の機材をスタッフと手分けして担ぎ、新幹線を乗り継いだり、山に登ったりする。カメラマンやディレクターと「ここまでは、ポーターだね」と軽口をたたきながら〝現場〟に向かう。

リポーターは「リ・ポーター」でありたい、というのが私の[7]持論である。英語の「ｒｅ」は「再び」や「繰り返す」「直す」「回復する」などの意味があるように、もとの素材に何らかの付加価値を与えるのが「リ・ポート」である。私はこれに「理」や「利」の字を当ててみる。「道理」「理屈」「理由」「理非」の「理」、つまりことわり、すじみちであり、「利益」「利子」「便利」「有利」の「利」、つまり物事に何らかの付加価値を添えるものである。

「理・ポーター」には、物事を分析し、判断し、確かな視点で切り取って運んでくる力が必要である。そして、それを的確なことばで伝える表現力が欠かせない。　取材現場は、的確なことばをモ[b]サクし、選択する場でもある。

足を運ぶ〝現場〟は、大事件が起きているところもあれば、表面的には平静なところもある。人間が大勢いるところもあれば、だれも住まない無人島ということもある。

A

実際私は、鹿児島県種子島沖に浮かぶ無人島、馬毛島（まげしま）に二度渡ったことがある。戦後、食糧生産のために百世帯余りが住み小中学校もあった。その後、離農が相次ぎ、牧草地は荒れ果て、ついには無人状態となった。そこに大量のバッタが異常発生した。バッタの大群が黒いかたまりになって飛び交う光景が、対岸の種子島から目撃されたと聞いて取材を試みた。

種類はトノサマバッタで、数は一億匹以上と推定される。島に生えるススキやチガヤを端から

食い荒らしている。グンブ[c]する姿はヒッチコックの「鳥」[*1]の一シーンを思わせる。捕虫網を振り回すと一度に二百匹余りが入ってくる。小動物ながら三角の眼が不気味である。

グンブする映像だけでも迫力はあるが、[B]ここでは、「理科」と「社会科」の両面から取材することにした。一年前に落雷による山火事があり島の四分の一を焼失、その後の少雨と乾燥がバッタの大量発生をもたらしたのではないかと昆虫学者は見る。通常年一回の産卵が温暖なこの島では二回行われているようだ。大量のバッタは、羽根が異常に発達しグンブを始めた。実験室で確かめると飛翔力は弱いが、風にのると対岸まで飛ぶことも考えられる。これが「理科」の視点である。

一方、無人化が急速に進んだ背景には観光業者による土地買収があった。一時、レジャー施設や石油備蓄基地の建設計画が持ち上がり、農家は次々と土地を手放した。結局、計画は行き詰まり、島は無人状態となった。荒れ地に生えた植物をバッタが食い荒らす。一二キロしか離れていない種子島の主要作物サトウキビに被害が及ぶのではないかと、地元の農政課では殺虫剤を撒[ま]くなど対応に追われる。これが「社会科」の視点である。

その双方から取材したのが一回目の「リ・ポート」であった。冬をまたいで騒ぎは収まるのか、春に再びゾウ[d]ショクするのか、不安を抱えながら年を越す。八六年一〇月の放送であった。

翌年ふたたび島に渡ると、今度は異様な光景を目にする。大量のバッタが枝先にしがみつくようにして変死している。原因は病原菌らしい。増えすぎた「種」に自然界のイ[1]ブレーキが働いたのではないかと専門家は見る。「理科」の視点である。人の住まない〝現場〟も多角的に取材すると、自然と人間の営みや時代の変化がウ[2]垣間見られる。

それから四半世紀、二〇一一年、この馬毛島がまた時折ニュースに登場する。今度は米軍の艦載機発着訓練の移転候補地として取りざたされているというのだ。無人の島にも、時々、「社会科」の波が押し寄せることになる。

これまでに私が足を運んだ〝現場〟で一番高いところは標高三七七六メートルの富士山頂、一番低いところは地下一〇〇〇メートル、北海道夕張の炭鉱の坑道である。

富士山頂には二回登った。一度は、登山家の今井通子さんのインタビューのためである。今井さんは登山家の夫と、エベレストへのネパール側と中国側からの夫婦同時登頂を目指してトレー

ニング中であった。山頂まで来るのならと取材に応じてもらえたが、条件が一つ。一人二リットルの水を持って来なさいというものであった。季節は九月末。山頂には水はない。

こちらはベテランの山岳カメラマンとディレクター、技術スタッフと私の四人。ただでさえ重いカメラと三脚、撮影機材を背負ったうえに、二リットルの水はかなりの負担である。それこそ二リットル近い大汗を流しながら登頂した。文字通りの「ポーター」である。

山頂は三〇メートルを超える強風が吹き荒れる。今井さんは世界初の試みへの抱負を熱っぽく語り、ヒマラヤで命を落とした仲間への思いを聞かせてくれた。テントは強風にあおられ、相手の声も十分聞きとれない。「向こうでは、こんなのは当たり前よ」と今井さんはサラっと語る。結局、エベレストへの夫婦同時登頂は天候に恵まれず果たせなかったが、そのとき聞いた話は、三七七六メートルまで足を運ばなければ聞けない迫力であった。そして、持参した水で調理してもらったカレーとスープの味は忘れられない。

リポーターは、汗を流して訪ねた〝現場〟から価値ある情報を運ぶこととともに、それを簡潔な「ことば」で伝える表現力を求められる。富士山頂のもう一度の取材では折角の情報を端的なことばにできなかったという苦い経験がある。

その時は「ゆく年くる年」[*2]と正月特番のため、年末に登り、山頂で越冬、越年した。最終日の生中継で、年に数回しか現れないという光景を目にする。雄大な「影富士」である。朝日を浴びて西の地面に富士山がくっきりと影を落とす。放送時間に合わせたように、である。

ありったけの修飾語を駆使して伝えよう。これが実は、リポーターとしてはやってはならないことである。「東の空にのぼったオレンジ色の朝日を背に受けて、山梨県側の本栖湖から精進湖のあたりまで雄大な影を伸ばしている、年に数回しか見ることができない、これが、見事な〝影富士〟です。」こんな長々としたコメントだったと思う。スタジオから、「え、どれがですか？」という問いかけが返ってくる。補足を加えようと思っている間に、画面は別のカメラに切り替わってしまった。せっかくの映像を全国の視聴者に味わってもらえないうちに、である。

なぜ、簡潔に伝えられなかったのかと悔いが残る。まず、「けさは〝影富士〟をお届けします」と言うべきだった。そして「富士山の形をした大きな影です。こんなに見事に見えるのは年に数回だそうです。」と端的に伝えるべきだった。「結論を先に」「センテンスは短く」がリポーターの鉄則である。それを身にしみて感じた苦い体験であった。以後、この教訓は、取材、リポート

の際に、常に自らに言い聞かせていることである。

報道リポートの〝現場〟は、派手な動きがあるところばかりではない。人々の発想が及ばないところや目の届かないところにこそ、発掘すべき情報が埋まっている可能性がある。

私は、後輩のディレクターやアナウンサーに、よくこんなたとえ話をする。「地下鉄〇号線のA駅〜B駅間があす開通する。残るB駅〜C駅間の完成は二年後」とする。そんな時、どんな発想をするか。まず、あすの開通セレモニーは各社が取材し、派手な話題となるだろう。二年後の全線開通にも各社が駆けつけるだろう。その間、地下鉄〇号線は人々の記憶から遠ざかる。しかし二年間待たなくても、地下には思わぬ情報が埋まっているかもしれない。[e]カッキ的な工事方法が取り入れられていたり、貴重な埋蔵物が発見されているかもしれない。テレビ局で働く者なら、人々が気付かない「地下」にも目を向けてみてはどうか、という提起である。

[D]テレビは目に見える派手な動きを追いかけたがる。大型ショッピングパークの完成や、新型スマートフォンの発売には各社のカメラが殺到する。リポーターのコメントはどれも似通ったものとなる。結局、企業の宣伝に乗せられただけとおぼしきものも多い。派手な動きは各社がそろって取り上げるが、「地下」での動きはなかなか表に現れない。しかし、世の中のさまざまな現象は「地下」や[オ]「水面下」で動いているのではないか。そこに目を配り、足を運び、掘り起こしてこそ〝価値ある情報〟となる。それを的確なことばで伝えてこそ、「理・ポート」である。

テレビはまた、刺激的な映像を扱いたがる。暴風警報が出ている。強風でトラックが横倒しになる。高波が防波堤を越える。そうした映像だけでは物足りないのか、リポーターが強風にあおられながら絶叫する光景がたびたび放送される。気象庁が外出を控えるよう呼びかけているさなかに、である。これは、〝理〟にかなった伝え方だろうか。

私の記憶では、以前、台風中継の際、飛んできた戸板がリポーターの背中にぶつかるというケースがあった。大事には至らなかったが、あとで見ると戸板には五寸釘が刺さっていた。以後、強風に身をさらしながらの台風中継は私の周辺では行われていない。吹き荒れる風雨は、無人カメラでも映せる。リポーターが身体を張って被写体にならなくても、〝現場〟の状況を伝えることはできる。身を守りながら冷静に伝えてこそ情報は伝わる。

リポートの基本は「いま」「ここで」何が起きているかを、確かな視点とことばで伝えること

である。水面下の目立たない動きも、理科か社会科の光を当てるだけで本質が浮かび上がってくる。経済的な分析も、歴史的な位置づけも、地球規模での検証も、社会科である。

E 「いま」は「何月何日」だけではない。「震災から一年過ぎても復興のめどがたたないいま」という捉え方も、「一向に景気が好転しないいま」もある。「ここ」は「日本列島の一角」という捉え方も、「原発から五〇キロ離れたここ」も、「世界中と海でつながっているここ」という捉え方もある。「円高が進むいま」「かつては町工場が元気だったここ」でなにが起きているか、「少子高齢化が進むいま」「高齢者のみが残ったかつてのニュータウン」もニュースの〝現場〟である。テーマに合った視点を定めることが、「理・ポーター」の仕事である。

リポーターは〝現場〟に足を運ぶことが第一であるが、表面的な現象を運んでくるだけの運搬係ではない。「理」「利」「ｒｅ」の視点を持った〝価値ある情報〟の運び役となってこそ役目を果たせるのではないか、というのが私の経験に基づいた実感である。

（加藤昌男『テレビの日本語』より）

＊1　ヒッチコックの「鳥」…一九六三年に公開された、アルフレッド・ヒッチコック監督による鳥が狂暴化する映画。

＊2　「ゆく年くる年」…大晦日から元旦にかけて放送される生中継番組。

問一　傍線部ａ～ｅに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、1 ～ 5 。

ａ　キョショウ　1

① 部屋の装飾にイショウをこらす
② シャリはご飯のイショウだ
③ そんなことはショウダクできない
④ 次の万博をショウチしたい
⑤ 花嫁イショウを見せてもらった

b

2　モサク

① 基本計画のサクテイ
② サッキュウな対応
③ サッコンの情勢
④ 辞書のサクイン
⑤ 経費のサクゲン

c

3　グンブ

① 極めてブベツ的な態度だ
② リーダーは皆をコブした
③ ずいぶんブバったあいさつだな
④ フショウブショウうなずく
⑤ ここの報酬はブアイ制だ

d

4　ゾウショク

① イッショク即発
② ショクギョウ病
③ フンショク決算
④ ショクジュ体験
⑤ ショクサン興業

e

5　カッキ

① 大統領カッカ
② カクイツ的な内容
③ カッパン印刷
④ カクチョウ高いデザイン
⑤ 今年度のカクテイ申告

（次頁に続きます）

問二　傍線部**ア**～**オ**の本文中における意味は何ですか。最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、6～10。

ア　持論　6

① 自分独自の考え
② ずっと主張している考え
③ 絶対に曲げられない考え
④ 社会一般の考え
⑤ 常に練っている考え

イ　ブレーキ　7

① バランスを崩さないための制御
② 新たなバランスを設定する装置
③ 変化を促進するシステム
④ 新たな生命を抑制するシステム
⑤ 変化が起きたことを知らせるアラート

ウ　垣間見られる　8

① こっそりと見ることが出来る
② 思いがけず一端を知ってしまう
③ 誰にも知られずに見ることが出来る
④ 一部ではあるが知ることが出来る
⑤ 様々な角度から少しずつ知ることが出来る

エ　端的な　9

① 確かな
② 要点を押さえた
③ 素早い
④ 簡単な
⑤ 短い

オ　水面下　10

① 表面に現われない部分
② 上からは見えない部分
③ 物事の下の方の部分
④ 水底のようにぼんやりとしか見えない部分
⑤ 水底のように深い部分

問三　傍線部A「実際私は、鹿児島県種子島沖に浮かぶ無人島、馬毛島に二度渡ったことがある」とあるが、それを通して筆者が述べようとしていることは何ですか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、11。

① 大事件が起きている所だけを見るのではなく、水面下のような場所にも目を向け足を運ぶことで、人々に知らせる価値のある情報を掘り起こすことができる。

② だれも住まないような〝現場〟であっても、足を運んで確かな視点から分析すれば、人々に知らせるだけの価値ある情報を運ぶことができる。

③ 人間が大勢いるところばかりでなく、無人島であっても直接出向いて精力的に取材をすることで、自然と人間の営みや時代の変化を知らせることもできる。

④ 人の住まない無人島のような〝現場〟であっても、足を運んで今何が起きているのかを確かめなければ、様々な現象がどうやって起こっているのかを知ることが出来ない。

⑤ 事件が起きている〝現場〟に足を運ぶだけでなく、専門家や地元の農政課などに話を聞き、多角的にその事件を分析していかなければ、人々に知らせるだけの価値ある情報を運ぶことはできない。

（次頁に続きます）

問四　傍線部B「ここでは、『理科』と『社会科』の両面から取材することにした」とあるが、「理科」の面からの取材と「社会科」の面からの取材を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、「理科」が 12 、「社会科」が 13 。

① 自然科学の視点から、落雷によって引き起こされた山火事とその影響、バッタの生態的特徴についての情報を提供する。

② 自然科学の視点から、山火事で島の四分の一が焼失したことや、それによって島から人が消え荒れ地となったこと等島の変化についての情報をまとめる。

③ 自然科学の視点から、環境・気候の変化とバッタの生態的特徴、更には近隣の島の作物との関連情報を提供する。

④ 社会科学の視点から、レジャー施設等の建設計画と島民の関係、再びやってくるバッタの産卵期への対応を紹介する。

⑤ 社会科学の視点から、島の無人化が進んだ背景にあった各施設の建設計画や、被害を広げないための地元の農政課の対応を紹介する。

⑥ 社会科学の視点から、風に乗って対岸まで飛んでいくであろうバッタの被害と、荒れた地を再び農地にするための活動を紹介する。

問五　傍線部C「ありったけの修飾語を駆使して伝えよう。これが実は、リポーターとしてはやってはならないことである」とあるが、それはなぜですか。説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、 14 。

① ありったけの修飾語を含む長いセンテンスは、貴重な映像を味わっている視聴者の邪魔になるから

② 結論から先に簡潔に述べ、補足を後から付け加えていくことで、視聴者が知りたい情報を漏らさず伝えることができるから

③ ありったけの修飾語を含む長いセンテンスは、本来伝えたい情報をわかりにくくさせてしま

うから

④　多くの修飾語よりも先に伝えるべき結論を述べないと、その後視聴者が貴重な映像をじっくり味わうことができないから

⑤　修飾語を駆使した長いセンテンスは、限られた放送時間内に視聴者に届けることができないから

問六　傍線部D「テレビは目に見える派手な動きを追いかけたがる」とあるが、これに対する筆者の考えとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、15。

①　派手な動きは各社がそろって取り上げるが、結局どのリポートや映像も似通ったものになってしまうため、各リポーター自身の視点をもっと活かす必要がある。

②　新商品の発売などは多くの人が関心を持つためテレビでもよく取り上げるが、リポーター自身が取材し自分の言葉で伝えるリポートでないと、結局企業の宣伝をさせられただけになってしまう。

③　人々の目が届かない「地下」や「水面下」にこそ発掘すべき情報が埋まっているのであり、各社のカメラが殺到するような派手なイベントはリポートする価値がない。

④　各社のカメラが殺到するような派手な動きは、必ず目に見えない「地下」での動きと連動しているものであり、そこを掘り起こしてはじめて価値あるコメントができる。

⑤　派手な動きには各社のカメラが殺到するが、世の様々な現象は表に現れない場所で動いているのであり、そこを掘り起こして適切に伝えるのがリポートである。

（次頁に続きます）

問七　傍線部E『『いま』は『何月何日』だけではない」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、 16 。

① 「いま」を単に今日の日付と考えるのでなく、テーマに合わせて経済の動きや歴史の流れなどの中の一つの地点と捉えるのが、「理・ポーター」の仕事の一つである。

② 「いま」を単に今日の日付と捉えるのでなく、テーマに合った確かな視点から、どの時期の一点を切り取るのか考えることが、「理・ポーター」の大事な役割の一つである。

③ 「いま」を時間の流れの中で考えるのではなく、どんな場所と関わっている、或いは関わっていない地点なのかという捉え方をしていく必要がある。

④ 「いま」を取材するためには、今日の状態だけではなく、いつから「いま」の状態が始まったのか、そしていつ終わるのかということを考えなければならない。

⑤ 「いま」を単に今日の日付と考えるのでなく、確かな視点からそのテーマにとって最も重要な時間を見定めていくことが、「理・ポーター」の仕事である。

問八　次の①～⑦のうちから、本文の内容に合致するものを**二つ**選びなさい。解答番号は、 17 ・ 18 （順不同）。

① テレビは刺激的な映像を扱いたがり、かつては強風の中でリポーターが状況を伝える光景も放送されていたが、身を守りながら冷静に伝えてこそ情報は適切に伝わる。

② 筆者は地下鉄の開通工事の際に取材に行き、貴重な埋蔵品が発掘されたり、最新の工事方法が取り入れられていることを伝えた。

③ 筆者が馬毛島を取材してから約四半世紀が経過した二〇一一年、馬毛島に再び大量のバッタが発生したことが大きなニュースとなった。

④ 筆者の一度目の富士山登頂は撮影機材に加え水を持っての過酷なものであったが、この時の取材には山頂でしかできない価値があった。

⑤ 筆者は二度目の富士山登頂で年に数回しか現れないという影富士を目にすることができたが、この時は映像を撮っただけでコメントはしなかった。

⑥　リポーターには物事を分析し、判断し、確かな視点で切り取る能力が求められるが、〝現場〟に足を運ぶ必要はない。

⑦　テレビは刺激的な映像を届けなければならないと考えられており、暴風警報が出ると、風で横転するトラックや高波が防波堤を越える現場にカメラが殺到する。

問九　筆者がこの文章を通して求めているリポーターのあり方を説明したものとして、最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、 **19** 。

①　人々の目が届かないような〝現場〟にも足を運んで、表にはなかなか現れない世の中の動きを確かな視点で切り取り〝価値ある情報〟として運んでくる。

②　表面的な現象そのままではなく、人々の目に映っていない水面下の目立たない動きにも光を当てることで価値を加えた情報を、ことばを尽くして伝える。

③　どんな〝現場〟にもできるだけ足を運んで、そこに見えている現象のみならず、確かな視点から掘り起こした〝価値ある情報〟を的確なことばで伝える。

④　派手な動きにばかり気を取られるのではなく、人々の発想が及ばないような〝現場〟を掘り起こし、そこで何が起きているかということを〝理〟にかなった方法でできるだけ冷静に伝える。

⑤　どんな〝現場〟にも足を運んで、貴重な映像を撮影するだけでなく、「理」「利」「ｒｅ」の視点で切り取った〝価値ある情報〟を、ことばを尽くしてしっかりと運ぶ。

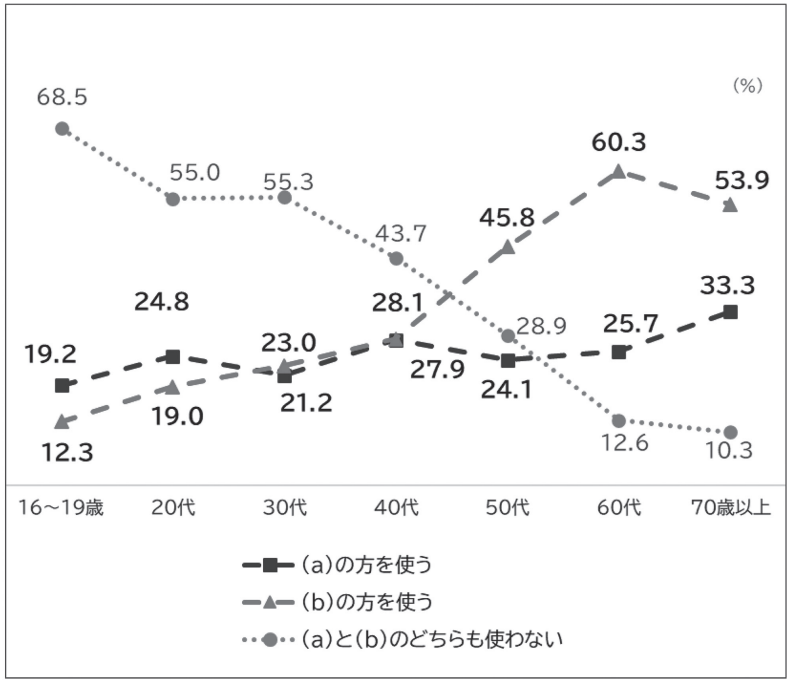
（次頁に続きます）

二

次の問一と問二に答えなさい。

問一　グラフ及び表を見て、次の文章の（ア）～（コ）に入るものとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、20～29。

【グラフ】



【表】

	平成23年度	令和3年度
（a）のべつくまなし	32.1	27.1
（b）のべつまくなし	42.8	41.9
（a）と（b）の両方とも使う	1.5	0.6
（a）と（b）のどちらも使わない	18.1	29.7
無回答		0.8
分からない	5.5	

（数字は%）

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/93774501_01.pdf

「のべつまくなし」という表現を辞書で引くと、「（　ア　）」という意味が確認できる。この「のべつまくなし」について、「のべつくまなし」との混同が見られるという調査結果がある（『令和3年度国語に関する世論調査』）。

右のグラフ及び表は、「（a）のべつくまなし／（b）のべつまくなし」のどちらを使うかたずね、回答結果をまとめたものである。

まず、年代別で見ると（【グラフ】）、50代以上では、辞書等で本来の言い方とされてきた（b）「のべつまくなし」を選択した人の割合が、本来の言い方とされてきたものとは異なる（a）「のべつくまなし」を（　イ　）ポイント以上、上回っている。一方、40代以下では、（a）

と（b）の差が小さく、中でも20代以下では、辞書等で本来の言い方とされてきたものとは異なる（a）が（b）を（　ウ　）。また、「（a）と（b）のどちらも使わない」を選択した人の割合が、（　エ　）代以下で40％を超えている。

次に、全体数を過去の調査結果（平成23年度）と比較すると（【表】）、（　オ　）しており、「（a）と（b）のどちらも使わない」の割合が（　カ　）ポイント以上、増加していることがわかる。

そもそも語源を考えると、「のべつ」だけで「（　キ　）」という意味があり、「のべつまくなし」は「芝居で演じ続ける意から」きている表現なので、漢字をあてると「のべつ（　ク　）なし」となり、（a）「のべつくまなし」は誤りである。しかし、調査結果を見ると、今後はさらに語源が意識されなくなるだけでなく、（　ケ　）可能性が大きい。既に10代においては、（　コ　）人が「どちらも使わない」と回答していることからも、そう言えるのではないだろうか。

20　ア

① 威勢よく一方的にしゃべり続ける

② 休む間もなく続けてするさま

③ 物事を早くするように強く促す

④ 態度などがはっきりせず、とらえどころがないさま

⑤ 考えが浅くて、軽薄なこと

21　イ

① 5　② 10　③ 15　④ 20　⑤ 25

（次頁に続きます）

22

ウ

① やや上回っている
② やや下回っている
③ はるかに上回っている
④ はるかに下回っている
⑤ 超えてはいない

23

エ

① 60
② 50
③ 40
④ 30
⑤ 20

24

オ

① （a）が減少し、（b）が増加
② （a）が増加し、（b）が減少
③ （a）と（b）のどちらも減少
④ （a）と（b）のどちらも増加
⑤ （a）と（b）の両方とも使うの割合が増加

25

カ

① 5
② 10
③ 15
④ 20
⑤ 25

26

キ

① 浅薄な考え
② 多弁
③ 促す
④ 絶え間なく続くさま
⑤ 曖昧なさま

27 ク

① 巻　② 膜　③ 幕　④ 漠　⑤ 縛

28 ケ

① 誤った用法が拡大し定着していく
② 本来の用法に修正されていく
③ どちらも正しい表現として定着していく
④ 全く新しい意味が生まれる
⑤ 表現そのものが使われなくなっていく

29 コ

① 過半数の
② 七割近い
③ 八割以上の
④ 90％以下の
⑤ 大多数の

問二 次のコラムは、▼を付した最初と最後の段落以外は順序が正しくありません。これを読んで、後の問いに答えなさい。

▼ 竜頭（りゅうず）、池の間、駒の爪……。これが何を指すかご存知の方はよほどの通だろう。それぞれお寺の鐘の頭部、腹部、すその名称である。突き棒が当たる部分は撞座（つきざ）と呼ばれる。

① 振り返れば、お寺の釣り鐘は幾度も苦境に立たされてきた。明治時代は廃仏毀釈（きしゃく）で多くが捨てられ、第2次世界大戦が始まると金属類回収令の標的に。戦後は再生産ラッシュに沸くが、近年は寺と檀家（だんか）の減少で注文が激減している。老子製作所も今夏、民事再生法の適用を申請し、いま再建の途上にある。

（次頁に続きます）

② 梵鐘（ぼんしょう）は仏教とともに日本に伝わった。スリムなものが多かったが、時代を経てすそに向かって分厚くなるずんぐり形が増える。「現代の日本の鐘の音はシンプルで余韻が長い。わびさびを好む国民性が映ります」

③ 元井さんによれば、中国や韓国の鐘はジャーンという銅鑼（どら）のような派手な音を放つ。日本では遠くまで届く穏やかな音色が特徴だ。「1里（約4キロ）鳴って1里響いて1里渡る」。職人たちが目指す名鐘の3条件である。

④ 「撞座の位置は千年以上かけて下へ下へと移動しました」。江戸時代から続く鋳物メーカー「老子製作所（おいご）」（富山県高岡市）会長の元井秀治（ひではる）さん（66）が話す。I 音色もジャーンやカーンという高音から、徐々にゴーンという重低音へ変わっていったという。

▶ きょうはいよいよ大みそか。各地の寺院から例年より力強く温かい鐘の音が響くことを切に願う。コロナ禍を吹き飛ばすためにも、そして各地の名工たちを励ますためにも。

（朝日新聞2021年12月31日　承認番号（24-1068）※朝日新聞社に無断で転載することを禁止する）

（1）それぞれの段落を正しく並べると、順序はどうなりますか。それぞれの位置に入る最も適当なものを、①～④のうちから一つずつ選びなさい。（完全解答）解答番号は、30 ～ 33 。

▶最初の段落―（ 30 ）―（ 31 ）―（ 32 ）―（ 33 ）―▶最後の段落

（2）傍線部I「音色もジャーンやカーンという高音から、徐々にゴーンという重低音へ変わっていった」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選びなさい。解答番号は、34 。

① 梵鐘は滅多に作られないものなので、その改良には非常に長い時間がかかった。

② 梵鐘の音には世相が反映し、古くは明るく派手だったが現代は暗いものに変わった。

③ 中国や韓国の高い音、派手な音に比べると、はっきりと日本人の美意識が理解できる。

④ 梵鐘を作る名工は減少の一途をたどり、過去の明るい音のものは作れなくなった。

⑤ 長い時間をかけて大陸の影響から脱して、日本人好みの鐘が作られるようになった。

以上で問題は終わりです。